

樽の蓋はいかやうに振動しても、離れぬものなるに、酒氣の慄慄の猛なる事を恐るべし、

〔令義解神祇〕孟夏略○中三枝祭謂率川社祭也、以三枝花飾酒樽祭、故曰三枝也、

〔江都管鑰秘鑑四〕樽屋藤左衛門由緒の事

先祖由緒書略○中

權現様家康○徳川濱松御退陣之砌、信玄士卒奉追之、彌吉天野與八郎防戰、其後所々御陣之節、酒樽奉

獻上候、此樽信長江被進候、於此御陣、信玄麾下松下圖大夫を打取候ニ付、信長公被聞召、彼の三四

郎働かと御意、此後依台命假名を樽と相改申候、

〔西鶴名殘之友四〕何とも知れぬ京の杉重

南都諸白と書付たる一樽はるく、送られけれど、我下戸なれば、さのみ嬉しからず、折節酒好の

人にきこしめせとて封を切れれば、酒樽に餅をつめて越しければ、上戸共驚き力を落しける、略○下

〔世間母親容氣三〕得生極樂芝居の中川

池田伊丹鴻池大鹿より積出す酒樽を、大切に取廻し、略○中道理なき金に眼をかくれば、天道の冥

加に盡きて、樽より我身の菰をかぶらん事、まのあたりなるべしと、正直の聞えかかれなるし隠浪路を開放し

て任せ置に氣遣無き問屋なればとて、次第に荷嵩まさり、略○下

〔我おもしろ下〕酒樽記

一升樽といへば、一生足るべき事なるを、一升は夢の如しと、二升めの樽にとつてかゝるは、足る

事を不知也、貧乏陶に足る事を知るは、貧くしてへつらふ事なきにあたり、四斗樽に足ることを

志るは、富て驕る事なきにあたるべし、山々の樂は其うちにあたり、下戸の内の神酒陶は、二ヶ月を

越て酢となり、上戸の家の樽酒は、一ヶ月を不過して亮となる、其亮樽上戸を退き、下戸に隨て終

に劔菱は菱餅と變じ、七ツ星はお備と化す、樽の鏡の圓なるは、則鏡餅にして、切ぬきし窓の方な